



[ 海の状況 (6/21~7/20) ]

神子表面水温……期間の中頃までは、概ねかなり高め(過去30年平均より1.0~1.5°C程度高め)で推移し、その後、平年並み(過去30年平均より±0.5°C程度)で推移した(図1)。

米ノ表面水温……期間全体をとおして、概ね平年並み(過去10年平均より±0.5°C程度)で推移した(図2)。

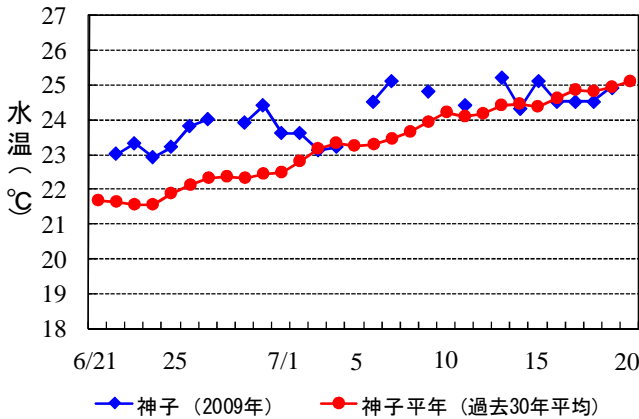


図 1. 若狭町神子地先における表面水温の推移。

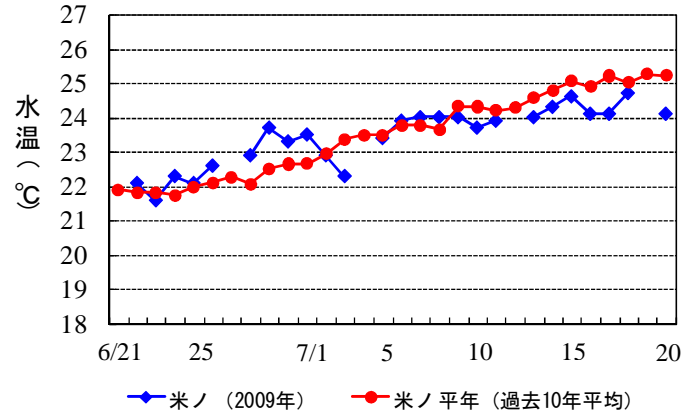


図 2. 越前町米ノ地先における表面水温の推移。

☆ 100m深水温……7月上旬の若狭湾沿岸域は12~15°C台の水域が広がっていた(図3, 4)。☆

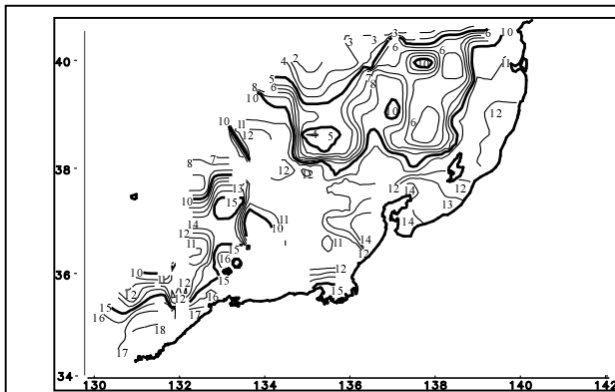


図 3. 2009年7月上旬の100m深水温。

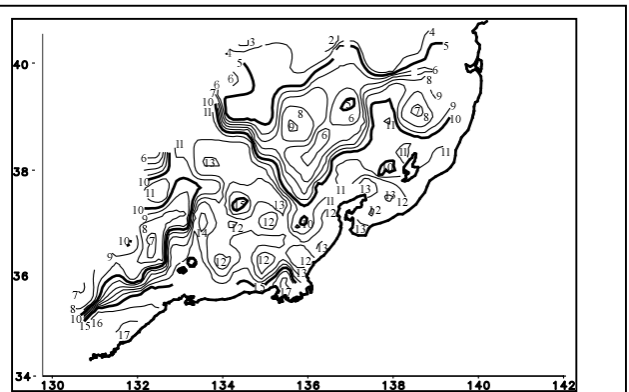


図 4. 2008年7月上旬の100m深水温。

資料：日本海区水産研究所ホームページ発表の日本海漁場海況速報

**平成21年度第2回日本海海況予報**

日本海区水産研究所が平成21年7月~9月までの日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介し(本予報は、水産庁ホームページ[ <http://www.jfa.maff.go.jp/> ]の報道発表資料の中に掲載されています。)

- 3月~5月の山陰・若狭沖の冷水域は、規模および接岸状況とも平年並みで、6月には小さな規模で接岸状況は平年並みであった。今後の張り出しは、“かなり弱め”で経過するでしょう。
- 6月の対馬暖流域の表面水温は、日本海西部は概ね“平年並み”で日本海北部は“平年並み”~“やや低め”で推移していた。今後は“やや高め”で経過するでしょう。
- 対馬暖流域の50m深水温は、日本海西部(福井県~島根県)および北部とも“やや高め”で推移していた。今後は日本海西部および北部とも“やや高め”で経過するでしょう。(瀬戸久武)

〔漁の模様〕

2009年6月の県内の総水揚量は1,503tで、2008年同月を253t下回った。マグロ類（2009年；14t、2008年；5t 以下同じ）、アジ類（448t、364t）、サワラ（79t、39t）、タコ（44t、26t）等は上回ったものの、サバ類（62t、91t）、ブリ類（225t、307t）、トビウオ（121t、330t）、スルメイカ（259t、323t）等は下回った。

漁業種類別の状況

定置網 ……アジ類、サワラ類等は上回ったが、サバ類、ブリ類(ブリ、ツバス銘柄主体)、トビウオ等は下回り、全体で前年を200t下回った。

底びき網 ……アカエビを主として漁獲し、前年並の漁獲量であった。  
 (小型底曳網漁業は、6月から8月は休業となっています)

釣り・他 ……タコ類等は上回ったが、スルメイカ等は下回り、全体で50t下回った。

〔県内主要漁業の6月の漁獲量〕

定置網				(単位：kg)			
魚種	2009年	2008年	99-08平均	底びき網のつづき			
カタクチイワシ	12,468	7,258	18,690	魚種	2009年	2008年	99-08平均
アジ類	446,762	363,390	443,406	その他	1,592	2,830	4,040
サバ類	62,421	91,331	37,623	合計	46,621	48,848	50,001
マグロ類	13,933	5,369	5,192	釣り、延縄、さし網、その他			
カツオ類	90	120	3,874	魚種	2009年	2008年	99-08平均
ブリ類	36,016	58,316	29,078	アジ類	1,434	368	620
サワラ	79,167	39,048	41,238	サバ類	27	128	340
トビウオ	120,749	328,448	172,761	ブリ類	1,488	2,280	4,248
マダイ	8,932	14,124	12,130	トビウオ	621	1,822	472
クロダイ	972	634	1,154	マダイ	4,062	3,052	5,212
スズキ	9,748	7,309	4,598	キダイ	6,233	4,592	3,213
ヒラメ	1,442	1,517	1,348	アマダイ	5,240	4,349	6,026
カマス	12,084	5,751	8,363	スズキ	6,153	4,905	5,851
フグ類	7,064	13,574	17,986	ヒラメ	3,161	4,527	3,248
タチウオ	46	165	385	その他カレイ	4,318	3,835	4,654
スルメイカ	3,697	4,489	15,086	カマス	97	488	166
アオリイカ	941	3,336	1,580	タチウオ	55	113	698
ケンサキイカ	3,999	1,743	22,382	アナゴ	2,599	3,046	5,994
その他	197,685	272,727	163,966	メバル類	4,494	5,430	4,711
合計	1,018,215	1,218,649	1,000,841	キス類	98	258	600
				スルメイカ	255,380	318,882	248,563
				アオリイカ	884	2,669	971
				ケンサキイカ	773	119	7,116
				ソデイカ	11	0	110
				タコ類	42,724	24,547	40,513
				その他エビ	1,542	1,001	1,851
				その他	96,861	102,143	105,856
				合計	438,253	488,554	451,035
				総計	2009年	2008年	98-07平均*
					1,503,089	1,756,051	1,583,020

\* まき網による漁獲量を含む。

〔近府県の漁模様〕

(6月下旬から7月中旬の漁獲状況……1日1隻または1統あたり。京都府の定置網漁獲量は舞鶴漁連への1日あたりの水揚量。)

石川県…… 定置網 …… フクラギ38kg、アジ206kg、サワラ50kg、トビウオ類115kg  
 京都府 …… 定置網 …… マアジ(ジツク)8.3t、サワラ(サコシ主体)4.3、トビウオ1.9t、ハマチ1t  
 兵庫県 …… 定置網 …… アジ1,116kg、サバ1,143kg、トビウオ141kg、シロイカ109kg  
 鳥取県 …… まき網 …… マイワシ3.4t、マサバ1.7t、マアジ17.8t、ブリ類0.1t

(瀬戸 久武)

# 平成21年スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海側の各試験研究機関によるスルメイカ漁場一斉調査が、6月下旬から7月上旬にかけて行われましたので、その結果についてお知らせします。

## (1) 福井県の調査結果

福井県沖合の4定点において、釣機4～6台を用いて毎晩約8時間ずつ釣獲試験を行いました。

- ・ 漁場水温…釣獲海域の表面水温は、19.8～21.0℃（2008年；20.1～20.8℃）、50m深水温は15.5～17.2℃（同；12.3～16.1℃）でした。
- ・ 釣獲状況…総釣獲尾数は1,680尾（2008年；3,122尾）、CPUE（釣機1台1時間あたりの釣獲尾数）は平均12.2尾（同；16.3尾）で、昨年よりも釣獲量が減少しました。
- ・ 体長組成…胴長（外套背長）は、調査点で様々で、17～18cm や19～21cmの個体が主体でした。

月日	6月29日	6月30日	7月1日	7月2日
調査開始位置	N 36°39.5' E 134°59.5'	N 37°59.7' E 135°03.2'	N 37°38.0' E 135°43.4'	N 37°00.5' E 136°03.5'
釣獲尾数	666	344	323	347
CPUE*	20.8	10.8	10.1	7.2
平均胴長(cm)	17.1	20.1	20.8	18.7
表面水温(°C)	20.9	20.3	19.8	21.0
50m深水温(°C)	15.5	15.9	16.1	17.2

※ CPUE；釣機1台1時間あたりの釣獲尾数

## (2) 日本海全体の状況

日本海区水産研究所の取りまとめによると、全ての調査定点におけるCPUEの平均は18.24尾で、昨年(21.06尾)の87%、近年平均(15.27尾)の119%の水準でした(近年平均は2004～2008年の平均)。分布状況は、秋田県～石川県沖(本州北部日本海)では胴長が17～18cm台、福井県～長崎県(西部日本海)沖では小型個体を中心でした。分布密度は、能登半島から佐渡周辺海域を中心に比較的高い調査点がありました。沖合域では、大和堆を中心にCPUEが30前後の分布密度が比較的高い調査点が多く、沿岸域に比べ胴長21cm以上の個体の比率が高かったものの、胴長23cm以上の個体は近年平均よりも分布密度が低く、沿岸域と同様に小型である傾向がみられました。

5月～6月の西部日本海の漁獲量は昨年および近年平均並みでした。

今後の見通しは、西部日本海では主に11月以降に漁場が形成され、来遊量や漁況は昨年並みでしょう。また、沖合域では主に大和堆周辺海域で漁場が形成され、8月下旬～9月には武蔵堆周辺にも形成され、来遊量や漁況は昨年および近年平均並みでしょう。

(瀬戸久武)

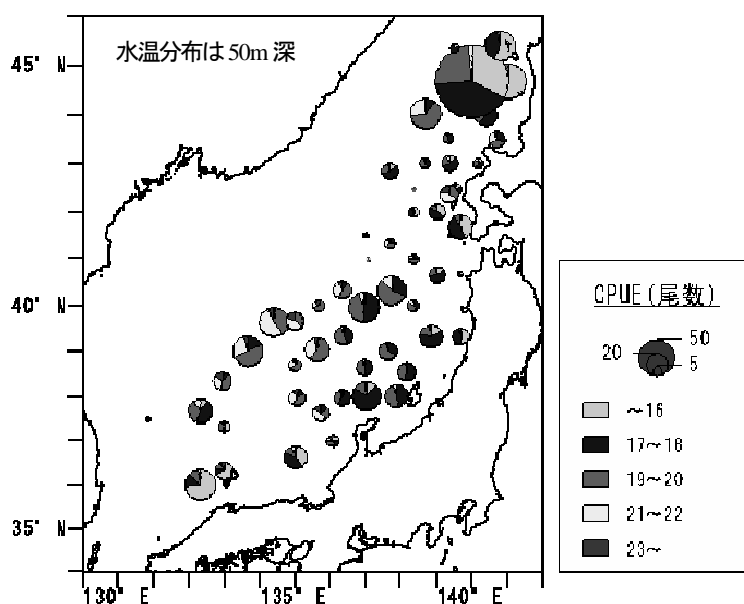


図.1 日本海におけるスルメイカの分布状況

# マナモコの種苗生産について

ナマコと言えば、冬の味覚の1つで、一般的には酢の物にして食し、磯の香りとコリコリした歯触りが魅力です。福井県の水揚げ量は20~40トンで推移していましたが、ここ3年は100~150トンと急増しています。この背景には、近年中国で「乾燥ナマコ」としての需要が高まったことで、ナマコの価格が高くなったことが挙げられます。漁業者にとっては漁家収入が増え喜ばしいことではありますが、ナマコが漁獲サイズの300g以上に成長するには3年を要することから、漁獲圧が高まれば、今後資源の枯渇が懸念されます。そこで漁業者から、ナマコ漁は岸近くで高齢者にも比較的容易に行える漁業であり、ナマコの増殖に取り組みたいとの要望を受けて、持続的に漁獲ができるように、水試と漁業者が協力して行う農林漁業者等共同提案型事業を行うことになりました。その取り組み内容は、柴漬けによるナマコの保護や天然採苗および人工種苗についてです。

今回はマナモコの種苗生産について紹介します。

マナモコは、ヒトデやウニと同じ棘皮動物で、体色の違いによってアカナマコ、アオナマコ、クロナマコの3タイプに大別されます。また、雌雄異体で外見から区別することは困難ですが、開腹すると雄は生殖腺の色が白く、雌はオレンジ色なので区別できます。主な産卵期は5~6月で、今年アオナマコの種苗生産を6月から始めました。ナマコは、ふ化後アウリクラリア幼生→ドリオラリア幼生→ペンタクチュラ幼生と3回の変態をして稚ナマコになります。アウリクラリア幼生からドリオラリア幼生までは浮遊生活、ペンタクチュラ幼生からは着底生活に入ります。浮遊生活開始から2週間程度で稚ナマコになります。種苗生産では、浮遊期には植物プランクトンを食するため浮遊珪藻のキートセロスを培養して与え、着底前のドリオラリア幼生期には着底用に付着珪藻を培養して付着させた波板を入れ着底させます。着底後は粉末海藻を与えて育てます。福井県では、昭和63年から10年間ナマコの種苗生産を実施していたので、生産技術は確立していました。当時は産卵誘発や、稚ナマコになってからの甲殻類による食害に苦労しました。今、当時を思い出しながら、種苗生産に取り組んでいます。生産を始めてから、ナマコは大きいもので1cmに成長しました。9月に数万尾の生産を目指して取り組みの真っ最中です。

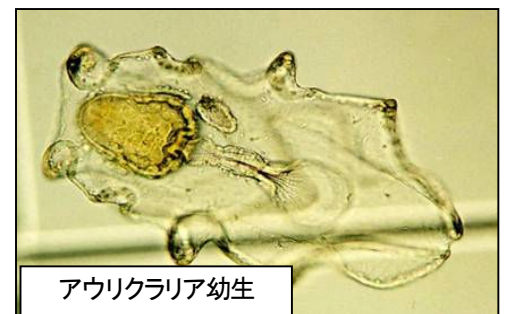
(川代雅和)



産卵誘発するため誘発剤を注射



誘発に反応して放精する雄



アウリクラリア幼生



ドリオラリア幼生



生産された稚ナマコ(サイズ約1cm)